

A group of women wearing headscarves are gathered around a table, looking at a document. One woman in the foreground is writing on the document with a pen. The document has some text in Arabic script. The background is slightly blurred, showing other people and what appears to be a classroom or meeting setting.

**軍事力への依拠は平和をもたらさない**

**繰り返されるアフガン女性の  
人権問題の政治利用**

**清末愛砂**

**(室蘭工業大学大学院工学研究科教授)**

# わたしとアフガニスタンとのかかわり(1)

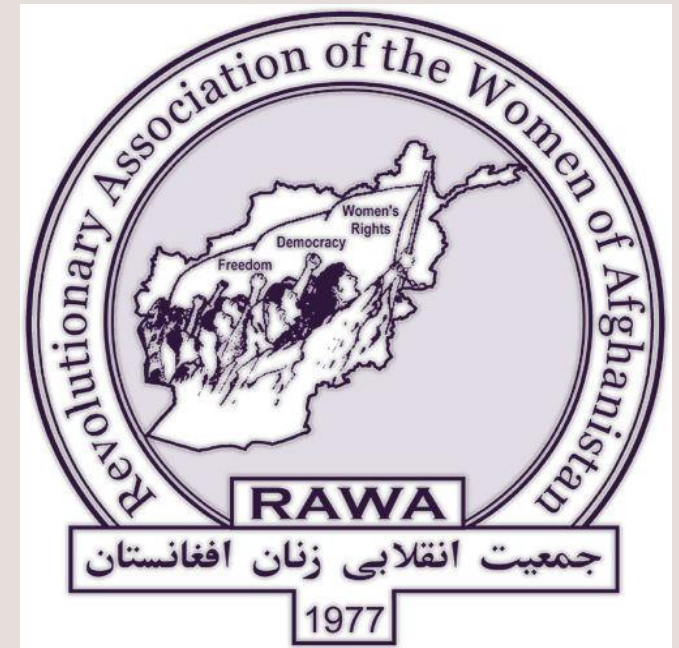
- 2001年の対アフガニスタン攻撃に峻烈な怒りを感じる→世界の最強国が世界で最も貧しい国の一つを攻撃
- RAWAの存在と声明に圧倒される。
  - 外国勢力ではなくアフガン民衆こそがターリバーン政権を倒す主体であると主張し、軍事攻撃を正面から批判（←無視される声）、米国のフェミニストによる同攻撃の支持（→私にとっての衝撃）
  - アフガン女性解放論：救世主発想（=虐げられたアフガン女性を救う）→「せっかく私たちが救ったのに、再び困難に」（2021年8月15日以降の反応）
- しかし、すぐにはかかわりを持つことができなかった（研究、別の活動、就職等の個人的事情）。
  - 私の場合は、アフガニスタンというよりはRAWAに対する強い関心と若い頃からのペルシャ文化圏全般に対する関心
  - RAWAに会いたいという気持ちを実現しよう／するぞ！と思ったのが2011年（現在の大学に異動して生活が落ちついてから）

2001年10月11日のRAWAの声明「アフガニスタンに対する米国の攻撃に関する声明」からの学び：哀れみの涙を流すのではなく、ともに闘う勇気を持つこと

## 45年間の闘い

# RAWAとは

- 1977年に創設されたアフガニスタンで女性の権利を求めて闘ってきた女性団体。
  - 目的：女性の団結の力で社会を変革し、女性の権利を含むすべての人々の権利と自由が保障される民主的な社会を築くこと（宗教から離れた世俗的な政府の樹立による）→その主張は日本国憲法の内容にかなり近い。
  - 女性の人権を侵害するあらゆる「勢力」（ソ連や米国等の大国を含む）を問題化し、女性に対する人権侵害を果敢に告発（1996年から2001年までの旧ターリバーン政権時代を含む）
  - 教育・次世代育成を重視：学校や寄宿舎、児童養護施設の運営、女性のための識字教室
  - 難民キャンプの民主的運営へのかかわり、女性の就労支援（サフラン栽培・販売）、クリニックの運営（パキスタン時代）、人道支援等
- 社会的マイノリティに対する視座：信頼形成へ



創設者ミーナー（1987年暗殺）





2021年8月16日の朝  
RAWAの若手メンバーが  
街へ繰り出して、ター  
リバーン批判の落書き

نخستین جرقه ایستادگی در برابر طالبان جانی  
باز هم توسط زن شجاع افغان رقم خورد.

زنان نخستین قربانیان حاکمیت وحشیانه طالبان اند، باید  
نخستین تیرها از سوی آنان به قلب سیاه طالب بخلد.

RAWAのフェイス  
ブックのページより

Kabul, Sep.4,2021

アフガン女性は奴隷化  
されてはならない  
(RAWAの長年のスロー  
ガンの一つ)

لننک افغان  
اسارت  
بذیرد

RAWAのフェイス  
ブックのページより

# アフガニスタンとのかかわり(2)

- 2012年からパキスタンやアフガニスタンでRAWA（アフガニスタン女性革命協会）の活動を追いつつ、アフガン難民や女性団体等への聞き取りをしている。
  - アフガン女性との＜連帯＞のあり方の模索の10年：ライフワークとしてのアフガニスタン→「支援」ではなく「連帯」
  - まだまだ途上にあるとはいえ、一つひとつの聞き取り（点）をつなげて線にすると、一定のことが見えてきたと感じている。
- RAWAと連帯する会（2004年発足）の便宜上の共同代表（2017年～）
  - RAWAがパキスタンで運営し、RAWAと連帯する会がオーストラリアの団体とともに支援していたヘウド高校やワタン孤児院（児童養護施設）へのかかわり
  - RAWAがアフガニスタン東部で運営する小学校の支援（現在進行中）
  - OPAWCが運営する女性のための識字・職業訓練を運営するOPAWCとのかかわり、シェルターを運営するHAWCAとのかかわり
  - AFCECOが運営するカブールの児童養護施設の子どもたちとのかかわり（交流、聞き取り、招聘等）。
    - \* 音楽や絵を学ぶ子どもたち。女性のオーケストラ「ゾフラ」のメンバーやアフガニスタン音楽院の学生や教職員は8月15日以降に徐々に海外脱出（スポンサーをしていた子も含む）。

現在も頻繁にRAWAメンバーと連絡をとりあう日々。



# 再び政治化される「女性の人権」(1)

- ターリバーン非難の道具として再利用(搾取)される「女性の人権」(アフガニスタンのことを忘れ去っていたというのに): **軍事攻撃から経済制裁へ→その影響で特に振り回されているのは誰か…女性たち**

ターリバーンと国際社会の  
(無意識な?) 共犯関係

## ■ 典型的語り口

- 「国際復興支援の下で、一定の自由を手に入れたアフガン女性たちが暗黒の時代に戻る」(→単純化された表現の問題性)

## ■ 女性に対する人権侵害がすべて、8.15以後に始まったかのような誤った理解を拡散(後述)。

## ■ 過去20年の復興支援期間の後半は特に、治安が著しく悪化(アフガン政府軍、ターリバーン、IS系勢力のみつどもえ)。近年(現在も)では爆弾事件が多発し、人々は恐怖を感じながら生きてきた。→現在、治安はかなり回復

- 女性をめぐる状況も悪化(女性の暗殺や脅迫状の送付を含む。「ゾフラ」のコンサートへの攻撃も)

「再び」の意味⇒2001年の対アフガニスタン攻撃の論理の一つ

「対テロ」の枠組みにく女性の人権の擁護>が加わる(2001年)

繰り返し

軍事攻撃により女性  
は殺されても、解放  
はされない。自明の  
こと。

誰がアフガン女性を追いつめてきたのか／  
追いつめているのか。

- 忘却／ご都合主義／差別的視点
- 自分たちの主張(ターリバーンを批判するか否かにかかわらず)にあう物語を選択・利用(自戒を込めて)
- アフガン女性の「経験」「思い」はさまざま(現況に関しても): そうだとしても、現状に抗するために必死に活動を続けてきた人々がいる。



新刊書『《世界》がここを忘れてもーアフガン女性・ファルザーナの物語』の「おわりに」より

「苛烈な暴力によりアフガン女性が一方的に虐げられているという“ありがちな”ストーリーだけを描きたいとは思いませんでした。暴力の深刻さは言うまでもありませんが、それに屈せず闘い続けてきたアフガン女性が確かに存在し、女性たちがいまなお、人権を求める〈闘い〉の最中にあることをきちんと示したかったのです。」

「想像を絶するほどの苦境を乗り越えながら歩んできた人々の存在を書き表すという行為は、アフガニスタンを攻撃した大国や各勢力を裏から操ってきた諸外国、それに迎合してきた国際社会がいとも簡単にアフガニスタンを忘れ去ろうとすることに対する、わたしなりの抵抗でもありました。」



RAWAの記録を残す↓



# 再び政治化される「女性の人権」 (2)

- アフガン社会のジェンダーに基づく暴力の構造を無視した主張
  - 20年間の国際復興支援下の軍事介入・関与がもたらした問題等を覆い隠す。
    - 外国軍の存在⇒コミュニティを侵略者から守るという発想⇒保守的な家父長的規範の強化を生んだ問題等(女性の移動その他の自由への制限が増加)。加えて、海外や地元のNGO等が真摯に実施してきたプロジェクトに対しても反感を生む要因に。
  - 20年にわたるアフガン女性の権利や自由を求める活動の存在が薄れる。
  - 国際社会が「復興支援」の名の下で後押しした政権:元北部同盟系(反ターリバーンの諸勢力ネットワーク)勢力出身者が多い⇒ターリバーンのジェンダー観と似ているので、大きな改革は難しい。
- 8.15以後の女性をめぐる**すべての状況**が、ジェットコースターが落ちるように変わったわけでない:もう少し丁寧に見るべき(根深い問題)→ただし、状況は非常に深刻(国連の人権専門家の指摘等)
  - ①**急激に悪化したもの**(7年生から12歳までの女兒の教育や女性の就労の大幅な制限、ジャーナリズムへの統制等)→ジャーナリズムへの統制が問題を覆い隠すことにもつながっている。
  - ②大きな変化を伴わず問題が継続して起きているもの
  - ③**以前から問題があったが、より深刻化したり再発したりしているもの**(男性親族の同伴なしの女性の遠出の禁止等)

共学（小学校と中学校）



ヘワド高校（ラーワルピンディー／パキスタン）にあったRAWA運営のヘワド高校の授業やRAWAと連帯する会による出張授業の様子（2016年春に閉校）



女性用の識字教室・縫製等の職業訓練教室等を開講していたOPAWCの授業風景  
(カーブル)

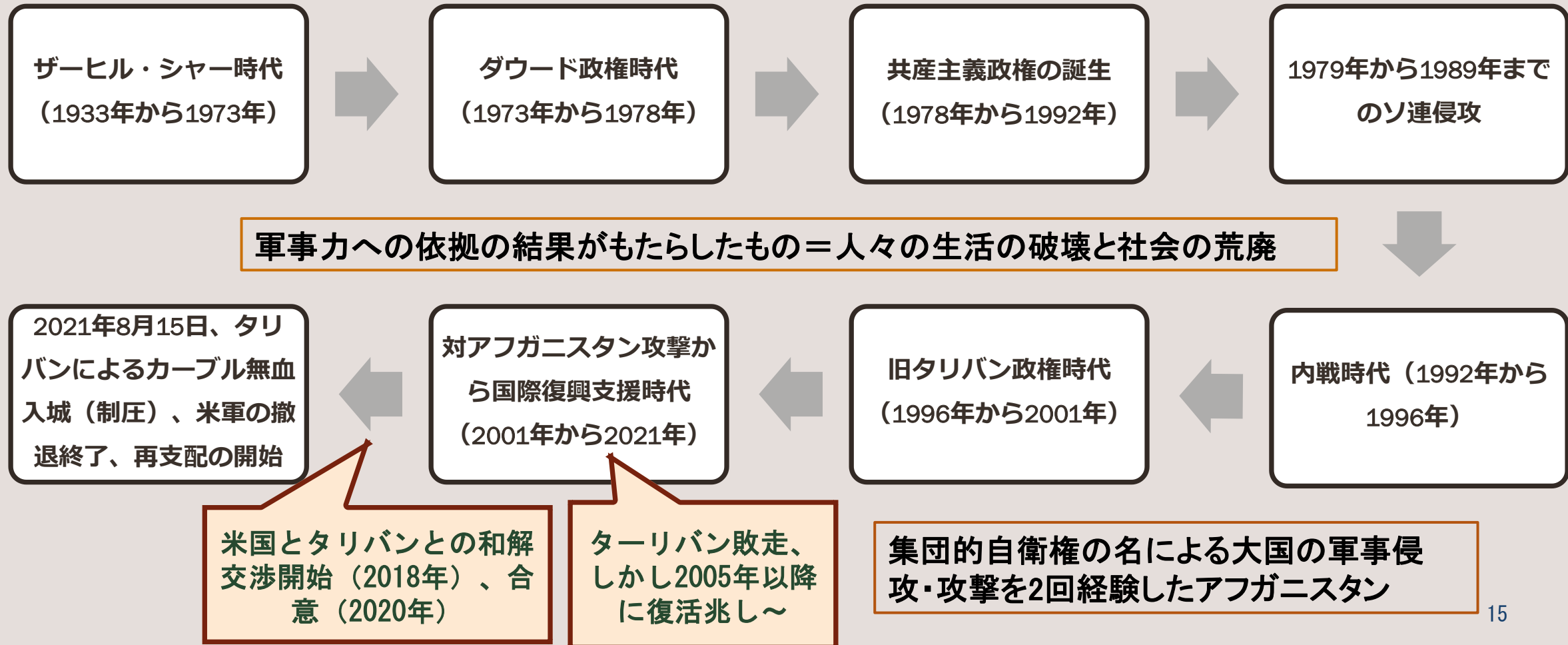


女性用の識字教室・縫製等の職業訓練教室等を開講している女性団体が実施していた妊産婦のためのワークショップ（カブール、2015年）



AFCECOが運営する児童養護施設（カーブル）

# アフガニスタンをめぐる歴史的出来事



- 2001年の対アフガニスタン攻撃に対する反省をともしながら、その後の20年間の国際復興支援が何であったのかを振り返ることはできない。
- 主要ドナー国である日本は、2001年の対アフガニスタン攻撃にどうかかわってしまったのか。
  - テロ特措法の制定→自衛隊のインド洋派遣→不朽の自由作戦を敢行する米軍等への洋上補給
  - 戦車の下で暮らす両親を待つ子どもの話を聞いて

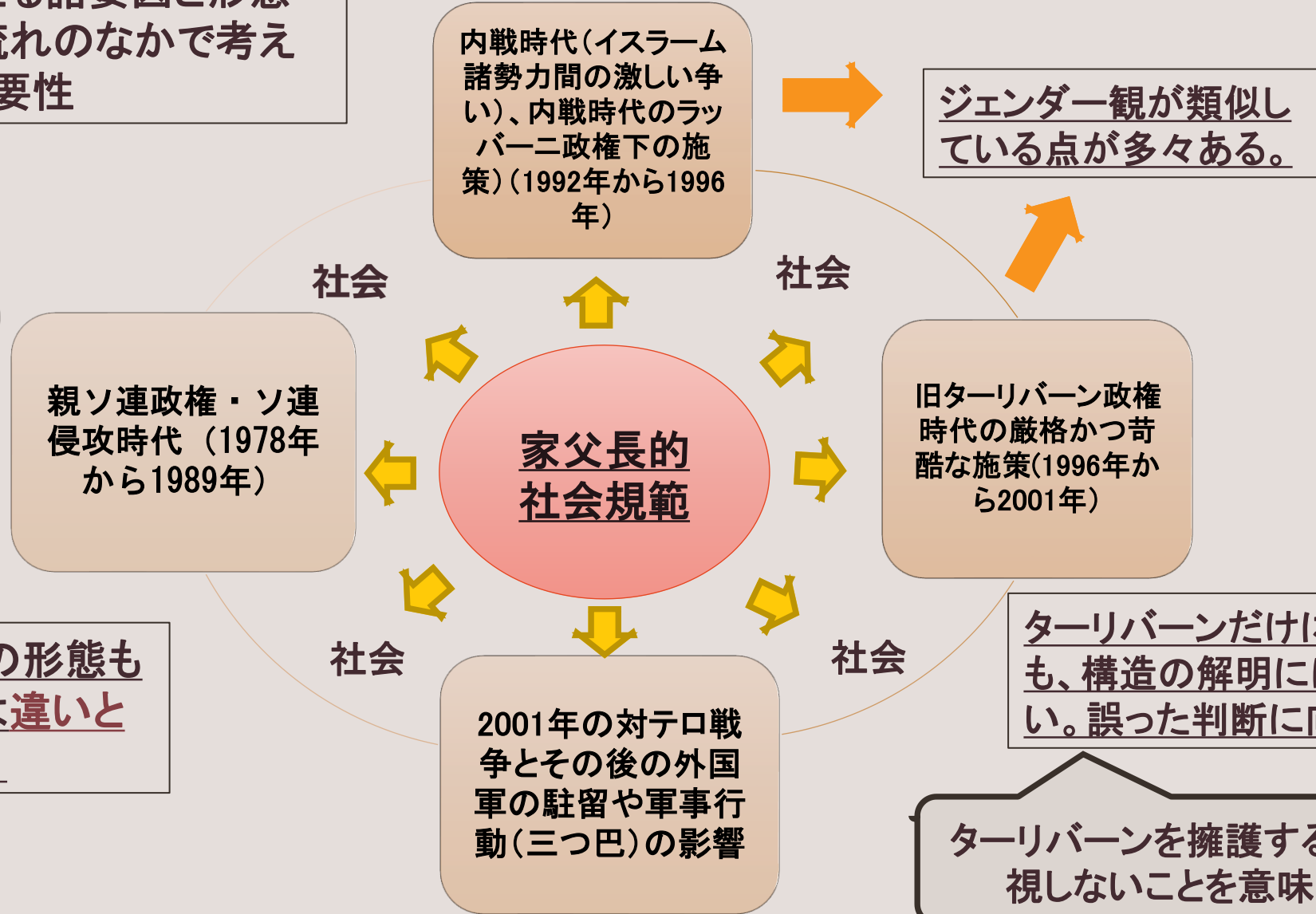


# アフガニスタンにおけるジェンダーに基づく暴力の構造(簡略版)

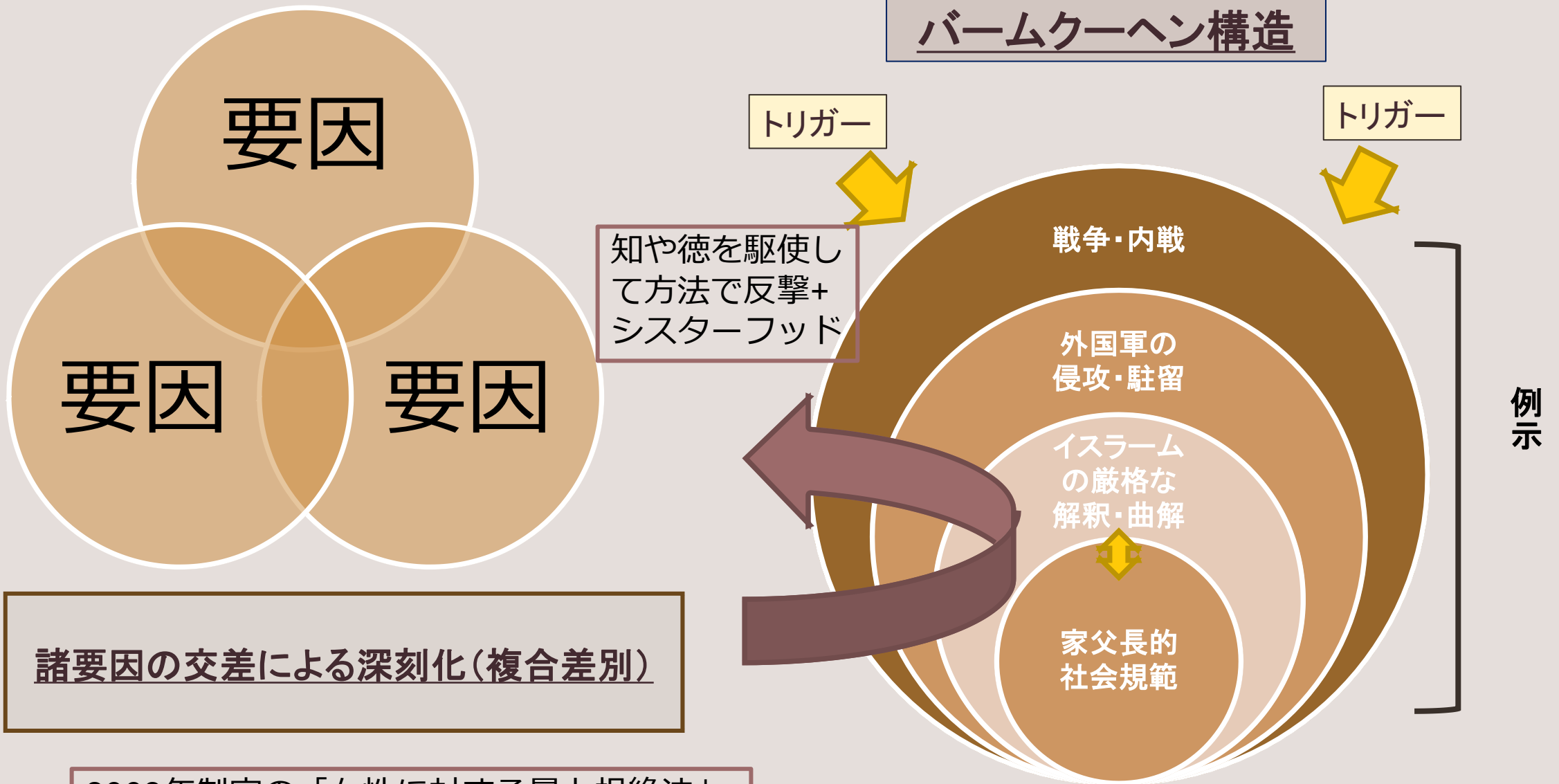
- 多岐にわたる諸要因と形態
- 歴史的な流れのなかで考えることの重要性

干ばつ、貧困、  
等が家父長的  
社会規範に基  
づく暴力を誘  
発する場合も  
(トリガー)

頻発する暴力の形態も  
時代によっては違いと  
連続性がある。



# バームクーヘン構造



2009年制定の「女性に対する暴力根絶法」の制定過程における女性たちの働き

要因の重なり合いにより、重層的な構造が出来上がっていく。

## 重層化された構造を見る必要性(1)

### 例1: 女兒の教育へのアクセスの制限が生む多重な問題

- 生きるための必要となる様々な知識を習得する機会を失う。
  - 将来に対する希望を失う。
  - 友人との交流を通しての家族以外の人間関係の構築・情報交換の場を失う。
  - 家族内の性別役割分担に基づく負担が増える(学校に行っている間は負担から解放)。家事負担。
  - 早婚・児童婚
- 十 親の苦悩(精神的負担)等

## 重層化された構造を見る必要性(2)

### 例2: 児童婚・児童売買問題

- 慣習の視点だけで見ても、何も変わらない。
- 戦争・内戦により親を亡くす可能性(シングルマザーもそれなりに多い)がある。
- 貧困ゆえに、自分の子を食べさせることが可能な人と結婚させている側面もある。

# 女性に対する暴力根絶国際デーの集会@カーブル (2021年11月25日)

تجمع زنان تحت حاکمیت زن ستیز طالبی به مناسبت روز جهانی محو خشونت علیه زنان  
RAWA gathering under the misogynist rule of the Taliban on Nov.25, 2021



RAWAのフェイス  
ブックのページより



RAWAによる国際人権デーの屋外集会（2021年12月10日、RAWAのフェイスブックのページより）

- すでにメディアによるアフガン関連のニュースがぐっと減っているが、アフガニスタンにかかわり続けたい。
  - 忘却や無関心が状況を深刻化させる。
  - 個人的には、建物の建設時からかかわってきた学校が9月に再開している以上、かかわりをやめるといふ「選択」はない。淡々と「支援」にかかわり続けるのみ。
- アフガニスタンは8月15日以前から現在に至るまで大変深刻な人道危機(飢餓で死者が出るレベル)にある。国際社会は今度よりいっそうこの問題への対応に全力を注ぐべき。  
⇒女性を含む社会的マイノリティへの影響⇒複合差別の視点を持つことの重要さ

カーブル

大規模な干ばつ、コロナ禍、脆弱な医療体制、8.15以後の海外資金の凍結と海外援助の停止等⇒人道危機

人道危機の要因をきちんと考える必要性：ターリバーン制裁・追い込みが何を意味するか

女性の生活難という意味では、結果的に共犯関係にあるターリバーンの施策と国際社会の制裁→ふりまわされる女性たち



バルフ州の国内避難民キャンプの様子、RAWAのフェイスブックのページより(2021年11月29日)



アフガニスタン東部でRAWAが運営している小学校 (RAWAと連帯する会が財政支援)の授業風景(2021年9月、RAWA提供)





RAWAが個人宅を使って行っている7年生以上の  
女児の教育（ホーム教育）（2021年12月17日  
開始、RAWAのフェイスブックのページより）



RAWAがカーブル等で実施している人道支援  
（2021年12月～。RAWAのフェイスブックのペー  
ジより）

冬に雪が降らないと夏は水不足になる。アフガニスタンに向かう飛行機の中で撮影した雪山



アフガニスタンの例を通して、軍事介入や軍事攻撃が長期にわたる破壊的影響力を発揮することが見えてくる。

そのようなことに日本が関わることをどう考えるのか。一人ひとりが主体的に自分の問題として考えていくことが求められている。



Meena's blood inspires all freedom-loving women!

Find out more at: [www.rawa.org](http://www.rawa.org)

---

RAWAやアフガニスタンのジェンダー問題に関連する近年の書籍の紹介（拙書の紹介で申し訳ありません）

---

①清末愛砂 『ペンとミシンとヴァイオリン－アフガン難民の抵抗と民主化への道』（寿郎社、2020年）

---

②清末愛砂（文）、久保田桂子（絵） 『《世界》がここを忘れても－アフガン女性・ファルザーナの物語』（寿郎社、2020年）

---

③清末愛砂・前田朗・桐生佳子編著 『平和とジェンダー正義を求めて－アフガニスタンに希望の灯火を』（耕文社、2019年）

---

RAWAと連帯する会HP（連絡先も書かれています）  
<https://afgan-rawa.blogspot.com/>



ご清聴、ありがとうございました。



ヘウド高校(閉校)の教室